

実践総合農学会 ニュースレター

Society of Practical Integrated Agricultural sciences NEWSLETTER 第12号 2016年2月15日発行



11月実践総合農学会 大子地方大会の帰途、袋田の滝の印象

目次

ご挨拶にかえて—第 10 回地方大会を振り返りつつ地方大会の感想 実践総合農学会会長 三輪 睿太郎 . . .	3
第 10 回地方大会に参加して 実践総合農学会理事 岩元 明久 . . .	5
茨城県農林水産部農村環境課 大塚 弘子 . . .	7
太子町地域おこし協力隊 村松 由依 . . .	8
東京農業大学校友会茨城県支部太子会 成井 重美 . . .	9
東京農業大学食料環境経済学科 玉木 志穂 . . .	10
東京農業大学醸造科学科 木下 龍輝 . . .	11
太子清流高等学校の生徒による研究発表へのコメント 東京農業大学教授 濱野 周泰 . . .	12
編集後記—ニュースレター第 12 号の編集作業を終えて 実践総合農学会事務局長 北田 紀久雄 . . .	13
実践総合農学会への入会にあたって 埼玉県立杉戸農業高等学校 田熊 重利 . . .	15
新会員のご紹介 . . .	16

表紙：三輪 睿太郎（実践総合農学会会長）

ご挨拶にかえて

—第 10 回地方大会を振り返りつつ地方大会の感想

実践総合農学会会長 三輪 睿太郎



2016年初めてのニューズレターをお届けします。

昨年の地方大会が昨年 11 月 21・22 両日に茨城県大子町で多数の熱心な会員の参加を得て行われました。大会の概要は下記の日程で示すとおりです。茨城県農林水産部、大子町、大子清流高等学校、東京農業大学、同大子町校友会ほか多くの方々のご協力を得て充実した大会を開催することができました。心から御礼申し上げます。

大会を振り返って感じたことを申し述べてご挨拶にかえたいと思います。なお、表紙の絵は私が趣味としている「パソコン版画」です。人々で賑わう袋田の滝の風景が印象的で下手をわきまえず掲載させていただきました。

実践総合農学会 第 10 回地方大会（大子町）プログラム

11 月 21 日（土）

基調講演

特色ある農林水産物を活用した地域活性化の展開方向 東京農業大学教授 宮林 茂幸

シンポジウム—農林業振興による地域活性化

座長解題 シンポジウムのねらい 東京農業大学教授 北田紀久雄

第 1 報告 わが国の農産物消費の基本的特徴と地域特産物の販売方策
東京農業大学教授 大浦 裕二

第 2 報告 茨城県県北地域における農山村の活性化について
茨城県農林水産部農地局農村環境課係長 大津 豊

第 3 報告 大子町「特産品のブランド戦略」 大子町農林課特産品販売室室長 藤田 貴則
パネル・ディスカッション

11 月 22 日（日）

第 1 部 座談会—地域農業の取り組み 司会 両角和夫 東京農業大学教授
(佐川果樹園) 佐川明宏氏 (奥久慈しゃも生産農家) 伊澤孝文氏 (高見園) 高信みどり氏

第 2 部 個別研究の成果発表 コメンテーター 濱野周泰 東京農業大学教授

1. 大子清流高等学校森林科学科、総合学科の生徒による「課題研究」の発表
・地域の林産物を支える方々と出会って—大子町の漆掻き体験を通して—
森林科学科 3 年 後藤雅志氏

・地域ブランドづくり十年プロジェクト
総合学科農業系列 3 年 猪狩乙羽・佐藤未来・仲野冬華の各氏

2. 実践総合農学会個別研究報告

第一日目のシンポジウムで大子町農林課藤田貴則氏は大子町が産出するコメ、リンゴ、しゃも、牛肉、茶、こんにゃく、漆はいずれもその品質においてわが国の最高位にあると述べた。コメは食味コンクールで毎年首位を争うし、奥久慈しゃもは美味で他の追随を許さない。リンゴも有数の適地であり、青森、長野のような全国ブランドではないが、観光農園や贈答用として評価は高

い。漆・こんにやくは他県商品にかけがえのない材料を提供しているという。

これだけのものを産出しながら、なぜ町が栄えないのか。人口減少、高齢化は他県の中山間地と同等にすすみ、耕作放棄もすすんでしまった。

その事情は二日目に行われた農家座談会での話を聞くとよく分かる。しゃも生産を営む伊澤孝文氏は、しゃも生産農家には利得が少なく、「食べさせてくれない」ようになっているという。氏の言葉を借りれば「販売組合や農協の職員は平均水準のサラリーをもらう。農機や肥料メーカー、しゃもを使うレストランも商売ができています。何故、農家だけが低収を強いられるのか。しゃもを飼育すると休日がもてないという苦労も加わり、子弟すら後を継ぎたがらない」というのが現実である。これこそが日本の農家が長年、直面してきたことなのである。

長野県の農家出身の東京農業大学宮林茂幸教授は、息子たちの帰郷を心待ちにしていた田舎の父が1980年ごろから、「帰らなくていい。帰っても村にはやることがない」というようになったという話で基調講演を始めた。高度経済成長時代に、農工間所得格差の解消をうたった旧農業基本法と旧食管法下で勤労者に対するベースアップのように毎年上げられた米価、白米を始め、畜産物や果物まで不自由なく購入できることで豊かさを実感して喜んだ消費者、地方に工場の立地と労働力の確保を競った製造業の拡大、ある時期までこれらが地域を栄えさせ、農業も機械化などの技術進歩を伴って安定的に存続した。

しかし、繁栄を謳歌しつつ、消費者の食への志向は拡大と多様化を続け、それに応えた食ビジネスの興隆は食材である農産物の輸入を前提にしたものになり、輸出大国の圧力もあって、農産物貿易拡大は時代の趨勢となった。その結果、いつの間にか百姓では食っていけなくなったのである。

宮林教授は基調講演の中でこれからの地方再生の要点というものを目配りよく述べた。いくつか、共感するものをあげれば、第一に、農山漁村を国の生命維持の社会資本として位置づけるゆらぎない政策の必要性である。第二に、その社会資本の形成に国民全体が関与することの必要性である。第三に国民参加の枠組みを作る地域の努力と、担う農林漁業者の「やる気」が不可欠である。第四に六次産業化のビジネスモデルは地域主体で独自のものを作り上げなくてはならない。食品産業のビジネスモデルあるいはサプライチェーンマネジメントは原料調達のコストカットに偏重しがちで農林漁業者はその犠牲になりがちである。また収益・効率を物差しにした安易な経営拡大は、ともすれば地域文化を破壊し、もともと持っていた地域の力をなくしてしまう恐れがある。第五に国民参加には都市生活者、製造業・流通業・医療・教育など他業種の参画が望まれるとともに、学術・技術部門の本格的な参画が望まれる。

二日目の座談会に登場した佐川果樹園の佐川明宏氏は不特定な顧客を求める通信販売やネット販売には目もくれず、観光来園者と、それを優先顧客とする贈答リンゴ販売に徹し、売り手・買い手が知古になる関係になるビジネスを狙っている。本大会にも顧客が参加してくれたそうだ。近辺の離農がすすみ遊休農地の利用を頼まれることがあるが、それを受けるとしても経営拡大のためではなく、来園者に対する環境整備が目的だという。

高見園の高信みどり氏は茶樹オーナー制で顧客を確保し茶を届ける他、茶カフェなどを営み、価格を主体的に提示できる販売にやりがいと手ごたえを得ている。2012年の福島第一原発事故後の風評被害もオーナーの理解に助けられたといわれたのが印象的だった。

伊澤氏は生産者の経営力の欠如を指摘し、飼料の購入、製品の販売に当たり価格交渉能力を持つことが将来の展望につながるという、佐川、高信両氏も製品の販売価格を受動的に押し付けられるのを嫌い、みずから提示した価格で販売できるようなビジネスモデルを選んでいく。

宮林教授の基調講演にあった「国民参加の枠組みを作る地域の努力と、担う農林漁業者のやる気が不可欠」という要件の後半は満たされそうだ。

地方大会は数を重ねて来たが、それぞれの開催地に特有の課題と展望が浮き彫りにされてきた。学者・研究者だけでなく行政関係者や現地の農業者や高校生が積極的に参加し発言する実践総合農学会ならではの地方大会である。これからも大切にしていきたい。

第 10 回地方大会に参加して

実践総合農学会理事 岩元 明久



平成 27 年 11 月 21 日と 22 日の 2 日間、茨城県大子町文化福祉会館「まいん」において、2015 年度実践総合農学会第 10 回地方大会（大子町）が開催された。地方大会は、「基調講演」、「シンポジウム」、「座談会」、「個別研究の成果発表」という盛り沢山の内容であったが、地方大会全体を通じたテーマは、シンポジウムのテーマでもある「農林業振興による地域活性化」であった。

大子町は袋田の滝で有名である。私もこれまで何度か訪れている。のちに触れることと関連してくるので、少し脱線してその経緯に触れたい。

以前の職場での同僚が今でも毎日、土浦の郊外の茅葺き屋根の家を早朝に出て、東京まで通っている。当然帰宅は深夜になり、たまには寝過ごしてタクシーのお世話になることもある。そして土日は百姓仕事である。だんぼだけは自分で続けているので毎年田起こしが始まると、稲刈りまで忙しい。それに家周りの世話がある。蔵の屋根の修繕が終わり、また、茅のふき替えが必要な時期になってしまった。そうすると、職人の手当から始まって茅（前は許可を得て近くの国道の法面の茅を自分で刈ったりもした）や資金（茅葺きの家を維持するのはまさに文化活動である）の確保などなど。そのような日々の間隙をぬって、私に日帰り温泉の誘いがくる。元同僚の車で名所巡りをかねて息抜きの温泉旅行へ行くのであるが、そのひとつのルートが大子町というわけである。

さて、基調講演は、東京農業大学の宮林茂幸教授の「特色ある農林水産物を活用した地域活性化の展開方向」であった。このままではわが国の農山漁村は 10 年持たないのではないかとの危機意識のもと、生命維持産業である農林水産業の場である農山漁村を社会的共通財産として、産官学が連携して活性化することの必要性と東京農業大学農山村支援センターの具体的な取組の紹介があった。

「シンポジウム」では、このような基調報告をもとに、座長を務めた東京農業大学北田紀久雄教授の座長解題の後、3 人の演者が講演をした。「第 1 報告 わが国の農産物消費の基本的特徴と地域特産物の販売方策：大浦裕二、東京農業大学教授」、「第 2 報告 茨城県県北地域における農山村の活性化について：大津豊、茨城県農林水産部農地局農村環境課係長」、「第 3 報告 大子町『特産品のブランド戦略』：藤田貴則、大子町農林課特産品販売室室長」である。大浦先生の報告は、食の成熟というわが国の消費構造の変化の多様な内容を解説した後、果実の販売を通して直売所の販売のポイントをわかりやすく紹介したものであった。大津氏からは、茨城県の農業・農村振興の現状を概観した上で、県農政の基本方針の中での県北の中山間地域農業・農村の活性化に向けた主な施策の紹介があった。藤田氏からは、大子町は第 1 次産業から地域起こしが発すること、大規模化が不可能なので高付加価値化を追求すべき農山村地域であること、そのため町長の肝いりの組織として特産品販売室が置かれ、アイデアと体当たりの営業で、イオンやローソンなどといった大手企業との連携を引き出し、共同でいろいろな大子町ブランドの売り出しに努力していることが紹介された。

3 名からの報告の後、質問票への記入を兼ねた休憩後は、北田座長の進行で、基調講演者の宮林先生も加わり、パネル・ディスカッションが行われたが、各報告者に対し多くの質問が寄せられた結果、それへの回答に終始した感があった。時間に制約があったためではあるが、演者間の意見交換がもっとあれば一層論点が深まっただろうと惜しまれた。

～大子町の特産物・郷土料理を満喫する～と名打った交流会では、地元の女性グループの協力等で、参加者は、しゃも、大子産米を使った絵巻寿司、こんにゃく、それに地酒等を満喫したことを付記しておく。

そして、大会2日目は、「地域農業の取り組み」をテーマに、東京農業大学の両角和夫教授の司会による座談会からはじまった。話題提供者は、大子町で、佐川果樹園を営む佐川明宏氏、奥久慈しゃも生産農家の伊澤孝文氏、高見園・高見カフェを経営する高信みどり氏の3名である。兼業のりんご園をUターンして継ぎ専業のこだわり観光りんご園へ、宇都宮市から東京へ出て働いていたときテレビで見た奥久慈しゃもに導かれ、同郷の茶園への嫁入りが契機となつたと、その動機はさまざまだが、自分が育てる特産品への熱い思いを胸に、過疎化という困難と向き合いながら、日々奮闘している3方の座談会は大変興味深い経験談の連続であり、まだまだ話は尽きないと思える内容の濃いものであった。

個別研究の成果発表は、大子清流高等学校森林科学科、総合学科の生徒による「課題研究」の発表と学会員による研究成果発表の2部構成になっていた。残念ながら学会員の研究成果発表は聞く機会を逃したが、大子清流高校生が発表した2課題「地域の林産物を支える方々と出会って—大子町の漆掻き体験を通して—：後藤雅志、森林科学科3年」、「地域ブランドづくり十年プロジェクト：猪狩乙羽・佐藤未来・仲野冬華、総合学科農業系列3年」の発表は興味深かった。特に、後藤雅志さんの地元の特産品である漆生産に関する、匠の指導で1年を通して実地に体験した記録に基づく発表は、これまで知らなかった漆掻きを知る機会になるとともに、地域の伝統と自然を守ろうとする若い情熱に感銘した。

さて、以上のように大いに学ぶところがあった本大会を振り返ってみての個人的な感想を最後に述べてみたい。

また私事になって恐縮だが、今回地方大会に参加するにあたって、初めてJR水郡線に乗った。3両編成であったと思うが、大子駅のひとつ手前の袋田駅までは、紅葉の袋田の滝を訪れる観光であろう、多くの乗客で車内は一杯になり座わることができないほどだった。1時間20分ほどかけて、あるときは久慈川の清流に沿ってゆったりと走る。しかし、私が感動したのはそのことではなく、東京から鉄道を乗り継ぎ数時間で、あのようにただの中山間の農村のまっただなかを走り続けたということであった（それは、私の出身地が遠隔地九州であることや、これまでの車での大子町訪問が観光名所のスポット間の移動であったための印象にすぎないかもしれない）。

水郡線の車窓からの眺めに心を奪われつつ考えていたのが、「農+X」という言葉がある。が、より正確には「X+農」という生活についてであった。土浦の元同僚は、やはり自ら選んで「X+農」の生活を続けている。しかし、通勤時間や農業関係の職場でありながらそのような配慮はまったくない職場であること等を考えるとオーバーワークの毎日である。ところで、個人の生き方を表す言葉として使われ出した「農+X」も、法人経営等が増える中で、内容が深まってきているように思う。例えば、多くの農業法人が首都圏の繁華街に出店するケースが増えているように感じる。そのような店で、従業員は「X」を経験し、翻って「農」への取組を豊かにしているだろう。

大子町のような立地であれば、「+農」により、会社の豊かさの幅を広げようとする「二地域居住」ならぬ「二地域」企業を呼び込む、6次化があってもよいのではないかと、また、そのようなテーマが幅広い実践活動を旨とする実践総合農学会の取組の1つになってもよいのではないかと、己の願望も込めて考えた。

第 10 回地方大会に参加して

茨城県農林水産部農村環境課 大塚 弘子



秋晴れの 11 月下旬、2015 年度実践総合農学会第 10 回地方大会が茨城県北部にある大子町で 2 日間に渡って開催され、私も参加させていただきました。

この度、本大会が大子町で開催されることになったのは、大会の事務局である東京農業大学と本県が平成 26 年 7 月に連携協定を締結したことによるものであり、これを機に現在、大子町をはじめとする県北地域を中心に各種事業を連携・協力し実施しているところであり、今後ますます連携・協力を深めていければと思っております。

さて、学会 1 日目は東京農業大学の宮林教授から「特色ある農林水産物を活用した地域活性化の展開方向」というテーマでお話し頂き、続いて行われたシンポジウムでは「農林業振興による地域活性化」というテーマで県や町等の取り組みについて報告があり、その後関係者によるパネル・ディスカッションが行われました。

このように関係者が一同に会し、地域活性化の取り組みについて全国、県、町と様々な立場からお話し頂き、それに基づき舞台上の座長をはじめ報告者と会場内の参加者が、ディスカッションするというのは大変有意義であると思いました。

また、交流会では、農産品加工グループ「奥久慈の味研究会」のお母さんたちにより、奥久慈しゃもソテーや花寿司、常陸大黒とゆずの黄金巻などの郷土料理や、地域おこし協力隊の方による茶のうま味を冷水でじっくりと引き出したお茶が振るまわれたほか、水戸藩 YOSAKOI 連による余興などもあり、地元の方々から心温まるおもてなしを受けたほか、学会参会者とも様々な情報交換をさせて頂き、交流の輪が広がりました。

2 日目は、町内の果樹園や奥久慈しゃも生産農家、お茶園等経営者の方々から、それぞれの持つ課題や農業経営の現状と今後の展開等について生の声を聞かせて頂き、平坦地に比べて生産条件等が不利な中山間地域において、移住・定住し就農することの厳しさや難しさ、農業経営を継続していく上での努力や工夫、6 次産業化に取り組む必要性等について学ばせて頂き、行政として今後どのような支援ができるかなど、改めて深く考える機会となりました。

この後は、大子清流高等学校の生徒さんたちによる研究成果発表や東京農業大学の学生さん等による個別研究報告があり、地域を支える若い担い手が徐々に育っていることを頼もしく思うとともに、将来、大子町や県、日本の農林業を支え、元気な農山村を創って行ってもらいたいと思いました。

全体を通して、2 日間という短い中ではありましたが、学問を排し、実際から学ぶという「実学主義」を重視した当学会に参加させて頂き、人的ネットワークと視野を広げることができ、今後、これらを仕事の中で活かして行きたいと思えます。



水戸藩 YOSAKOI 連による余興

第 10 回地方大会に参加して～大子町の地域おこし協力隊として～

大子町地域おこし協力隊 村松 由依

平成 27 年 5 月より、地域おこし協力隊として大子町にお世話になっている東京農業大学森林総合科学科 2010 年卒の村松 由依と申します。大学の頃より、環境教育、地域振興の分野に関心があり、いつかは山間地域の力になれる仕事がしたいと思い、現在、「大子町」の地域おこし協力隊として活動をさせていただいております。今回、実践総合農学会に裏方スタッフとして関わらせていただきましたが、「大子町」と「地域活性」をテーマにしたシンポジウムに参加させていただくことができ、私自身、大変勉強になったと同時に本当に考えさせられる内容だと感じました。

特に、2 日目の奥久慈りんご・奥久慈茶・奥久慈しゃも、それぞれの生産者の方々の実践や経営に関しての座談会では、収穫時期になるとまたきてくれるお客様に対して「大子町に来てくれるお客様をきってはいけない」という思いで経営をしていること、「おかえりなさい」と言える関係をつくること、「どうして農業はもうからないのか」、等、それぞれの思いで日々仕事をしているということをお大変深く感じました。

私は、現在、大子町の“ファン作り”をテーマに、町の方にヒアリングを行い、県外では知られていないような町の方々の取り組み等の情報をピックアップした紙面の作成を行い、町内の情報を県外に発信する活動を行っております。情報をお送りして、実際に町に来訪して下さったお客様に対し、まだ小規模ではありますが、実際にお客様を町内にご案内しながら、大子町の生産者や職人と触れ合えるような行程組みをし、地場体験のプログラムをご案内する店舗様にお願いしています。その際に、お客様の外からの目線で、大子町で過ごした際の振り返りをさせていただいています。その中で、よくあがる声は、「こんなにいいイベントや食べ物があるのに知らなかった。」「大子町の人たちは本当に親切ですね。」「また会いに行きたいです。」「こういう環境に住んでみたい。」という言葉です。私自身、以前に、店舗運営の仕事に携わっていたこともあり、リピーターのお客様の存在に大変支えられていたと感じた経験から、「この町が好き!」と仰ってくださるファンの方々を増やすきっかけを作っていけるようになりたいと考えています。

1 度、何らかのきっかけで来訪されたお客様が、町に好感を持ってくださり、また“行きたい場所”、好きな町として感じていただくことを目標に活動していますが、私個人としてできることには限界があります。しかし、2 度目にご来訪の方は「大子町を応援したい」と仰ってくださり、ふりかえりを行う際に、一緒に、大子町について、考えてくださったり、町でのお買い物や地元の方とのふれあいを楽しみにしてくださっています。

小さな広がりやを“コツコツ”と積み上げて、いずれは、大子町が「好き」「一緒に地域をよくしていきたい」というてもらえるような人達と一緒に交流人口を増やしていけるような取り組みにつなげていきたいと考えています。



地域おこし協力隊のメンバー

本人：写真左

第 10 回地方大会へ参加して感じたこと

東京農業大学校友会茨城県支部大会 成井 重美



大学と茨城県のご配慮により、去る 11 月 21 日から 22 日の 2 日間、茨城県大子町において実践総合農学会の地方大会が開催された。これは、東京農業大学と茨城県が連携に関する協定を締結し、その一環として開催されたものと認識している。

県内には校友が住所判明者だけで約 3,200 名、うち大子町には 55 名が在住し各分野で活躍している。大子町での大会の開催は、校友にとっても誇りであり期待も大きい。北田教授等が現地に事前打ち合わせに来られた時、地元大子町や近隣に在住している校友ができるだけ参加することを約束した。当日は、大会の校友もスタッフとして受付や駐車場誘導の役割を担った。また校友 25 名が参加した。

この大会のテーマは、中山間地域における農林業振興による地域活性化の実践的かつ総合的な糸口を探ることを目的にした、まさに地元大子町の抱える課題そのものであった。

大子町は、7 割の森林面積と、2 割の耕地を活用して、昔から農林業の盛んな地域で、山間地の特性を生かして木材、お茶、蒟蒻、葉タバコ等の工芸作物やこうぞ、漆などの特産林産物、米などの普通作物を栽培していた。さらに戦後、りんご、酪農、常陸牛の素牛である黒毛和牛などの新規作目が導入され、山間地域に合った複合産地が形成された。しかし、経済のグローバル化と食生活の多様化等の影響により、農林業は平成の時代に入って数字上は急激に衰退しつつある。1 町 8 村が合併して大子町が誕生した昭和 30 年に、人口は 4.3 万人であったが現在は 1.8 万人、同じ時期に総農家数は半減、経営耕地面積は 3 分の 1 と大幅に減少している。また、農業産出額は昭和 60 年の約 60 億円から平成 10 年以降は 30 億円台にまで減少してしまった。この結果、商店街の衰退も著しい。近年では県が育成した奥久慈しゃも、常陸大黒や、直売所出荷の野菜類、枝モノの花桃等が導入されているが、それぞれ生産量は少量である。現在、比較的若い農業者が残っているのは、観光リング園や製茶加工等で自ら販売を行っている経営者である。

宮林茂幸教授は基調講演で、これからの地域づくりは、人づくり、本物づくり、そして産官学連携を挙げられた。また、全体のグランドデザインづくり、町のゾーニングと特産品づくり、ブランド形成の 3 点の重要性を述べられたのが印象に残った。

シンポジウムや 3 名の農業者による座談会も、それぞれ示唆に富んだ内容であった。また、大子清流高校生による個別研究の発表は発表者にとって貴重な体験になったと思われる。

今回の大子町で開催された地方大会は、広い視野から活性化について考える糸口を掴むことができたのではないかと考える。今後も引き続き連携協定に基づき、大子町においても東京農業大学の総合農学の英知を結集した取り組みを行っていただけるとのことなので、地元で在住する校友の一員として大いに期待しているところである。

特に、これからの時代変化に対応できる若い人材の出現が最も待ち望まれることであると考えているので、提案ですが、大学の教授等による若者を対象にした活性化塾のようなものを一定期間、定期的に開催していただき、人材の育成と具体的取り組みへの継続的なお手伝いができないか検討願えれば幸いです。

この大会の開催は、大子町にとって大変意義深いものでありました。学会及び大学関係者の皆様に感謝申し上げます。

第 10 回地方大会に参加して

東京農業大学食料環境経済学科 玉木 志穂



東京農業大学食料環境経済学科に所属する玉木志穂と申します。2015年11月21日～22日に茨城県大子町で開催された実践総合農学会第10回地方大会に参加した感想を報告させていただきます。

実践総合農学会は2度目の参加でした。初めて参加したのは、2年前の愛媛県西条市で行われた第8回地方大会でした。当時、私は大学2年生で、所属している研究室活動の一貫として、今後の研究に活かすために、個別報告を聴講しました。

それから2年経ち、今度は自分が報告者として第10回地方大会に参加しました。今回は基調講演、シンポジウム、パネル・ディスカッションを聴講し、交流会では地元農産物を使った地元の方の手作り料理をたくさんいただきました。さらに2日目には、地域農業の取り組みについて座談会を聴講した後、個別報告を行い、帰りには袋田の滝や大子町の直売所を訪れ、大子町の地域資源である農産物や観光について体験的に学ぶことができました。

2日間を通して、学会で聴講させていただいた内容はどれも勉強になりました。そのなかでも、2日目に行われた地域農業の取り組みについての座談会が印象的でした。地元のりんご農家、しゃも農家、お茶農家の方による座談会でした。初日の交流会でいただいた農産物の生産者の方のお話だったので、親近感を持ってお話を聞くことができました。高品質な商品を生産することや地域とのつながりなど、日頃、聞くことのできない現場の方の貴重なお話でした。地域農業を発展させるために、大子町の農産物の魅力を発信する努力を行っていることを学びました。

また、私は個別報告を行いました。報告内容を発表することばかり気を取られて、相手に伝わる話し方や質問に対して的確な回答をすることが十分にできませんでした。基調講演やシンポジウムを担当された方々のプレゼンテーションの見やすさ、わかりやすさや質疑応答の的確さがとても印象に残っています。順序立てて報告を行うことや見やすいスライドを作成することはもちろん、相手に伝わる話し方をすることや、質問の意図を的確に理解し対応することも今後身に付けていきたいと強く感じました。

2年前の参加とは異なり、今回は地方大会の全行程に参加したことで、貴重なお話を聞くことができただけでなく、自分の課題も見つけることができ、有意義な時間を過ごすことができました。大子町の農産物の生産者の方の話を聴き、それらを食し、さらに売っている場所も訪問できたことで、大子町の農業について実践的に知ることができました。ありがとうございました。

来年度も機会があれば、ぜひ地方大会に参加したいと思っています。

第 10 回地方大会に参加して

東京農業大学醸造科学科 木下 龍輝



今回の実践総合農学会第 10 回地方大会への参加で私は初めて大子町に訪れました。自身が福島から東京に出てきたというのもあってか、福島との県境にあるこの町に、初めてながらもどこか親しみを感じたことをよく覚えています。車窓から望む景色が祖父母の暮らす福島の田舎町に重なって、懐かしい気持ちにすなりました。

そのせいか今回の学会では一日目、二日目と大子町の現状を踏まえて語られた「農林業振興による地域活性化」についてのシンポジウムと「地域農業の取り組み」についての座談会が強く印象に残っています。このシンポジウムと座談会では、両者共に「大子町をより良くするために」といった所に主眼を置いたものでしたが、そこから受ける印象はそれぞれ大分違ったように感じました。一日目のシンポジウムでは特産物の販売方策や農山村の活性化、大子特産品のブランド戦略の実例などが語られ、非常に前向きで期待の持てる内容でしたが、二日目に行われた実際の農業従事者の方々による座談会では、町の過疎化や後継者問題、地域農業経営の難しさなど現場の実情が語られており、現状の厳しさが鮮明に感じられ、初日とは対照的な内容となっていました。

この二日間のシンポジウムと座談会では大子町の明るい面も、そして抱えている問題も深く議論されていました。そのなかで強く印象的だったのは、壇上の方々が皆、大子町のために「自分に何ができるか」という部分に非常に真摯に向き合われていたことです。先生方は自らの研究を、農家の方々は日々の経験を、様々な立場から知識が持ち寄られ一つの問題に包括的に取り組む様子は、まさしく実践総合農学会の掲げる問題解決のための実践的な学問の形であったと思います。

近年、一括りに農学と言っても細分化、専門化が進んでおり、その分だけ広い視野を持って学問に取り組むということが難しくなっています。私自身も醸造学という専門的な分野を専攻していますが、振り返れば実験室で研究に没頭していると目の前のデータや実験結果ばかりに気を取られ、「自分の研究が何のために、誰を豊かにするための物なのか」という本質が疎かになってしまいそうになることがありました。東京農業大学には初代学長である横井時敬先生の「農学栄えて、農業減ぶ」という警句がよく伝えられていますが、今学会の諸先生方の姿から改めてその意味を心に刻むことが出来ました。

農学という学問に向き合う一人の学び手として今一度襟を正し、大学に戻っても今回の学会で学んだこと、感じたことを忘れずに真摯な気持ちで自らの研究に臨んでいきたいと思えます。

大子清流高等学校の生徒による研究発表へのコメント

東京農業大学教授 濱野 周泰



実践総合農学会第10回地方大会の開催にあわせて、地元の大子清流高等学校の生徒による「課題研究」が2題発表された。森林科学科の後藤さんが発表した「地域の林産物を支える方々と出会って—大子町の漆掻き体験を通して—」は、大子町の名産となっている漆について、地元の名人の下で漆の生産を6～9月の漆掻きから、漆畑の除草刈り、収穫終了木の伐採、畑の地ごしらえ、苗起こし、3～4月の植栽まで1年をとおした経験に基づくものである。この研究から得た、漆を掻くまでに長い時間を必要とすることや、漆の正確な情報を伝達することの重要性、漆生産の持続に関する報告は、大学進学を希望する同君にとって向学心を高める意味でも有意義な内容である。

また、総合学科農業系列の猪狩さん、佐藤さん、仲野さんらの「地域ブランドづくり十年プロジェクト」についての報告は、地域活性化プロジェクトの1つとして地域ブランドの創成にサボテンと家庭用園芸などに着目した内容である。サボテンの栽培は昨年（2014）から取り組み、用土の調整をはじめ栽培技術が確立しつつあり、一定の成果が得られている。今後の展開には栽培した苗の利用を視野に入れることが重要である。冬の寒さが厳しい大子町で、冬でも緑を楽しむには室内におく必要があるが、サボテンの生育特性は室内環境に適性を備えている。家庭用園芸用品開発の成果と一体化して発信することで室内用の観賞植物として期待が広がるものである。これらの研究発表は、地元産業の継承や新たなブランドの創出など、現在話題になっている地域再生について具体性を持って展開できるストーリーのある内容である。



研究発表の様子



コメントを聞く発表者

編集後記—ニュースレター第 12 号の編集作業を終えて

実践総合農学会事務局長 北田 紀久雄



平成 28 年を迎え、会員の皆様にはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。本年も実践総合農学会の活動にご支援と積極的な参加をお願い申し上げます。

さて、本ニュースレターは、平成 27 年 11 月 21 日（土）～22 日（日）にかけて茨城県大子町（大子町文化福祉センター「まいん」）で開催されました実践総合農学会第 10 回地方大会の様子について、参加者を中心にご寄稿をいただいたものです。いずれの原稿も、それぞれの視点から今回の地方大会の討議内容や課題、参加した感想などをしっかりと執筆いただき、臨場感のある大会報告となっております。ご寄稿をいただいた皆様に感謝申し上げます。ニュースレターは、学会員の皆さんに大会の様子を速報・共有する有益な情報媒体ですので、この情報を会員の皆さんには是非ともご活用いただければ幸いです。

私自身は、昨年 7 月 25 日（土）のシンポジウム・総会から事務局長に就任し、当初前事務局長の板垣啓四郎先生が企画した大子町での地方大会の開催に向けて引き続き努力してきました。開催に際しては、板垣先生のアドバイスはもとより、地元の大子町役場の皆さんや東京農業大学と連携協定を結んでいる茨城県の皆さんに多大なるご協力を賜り実現にこぎ着けることができたと考えています。また、東京農業大学校友会大子町支部の皆さんにも多くのご支援をいただきました。加えて、当日、基調講演をご担当いただいた宮林茂幸先生、シンポジウムでご発表いただいた 3 人の皆さん、座談会で貴重な意見をいただいた地元農家の皆さん、高校生の発表をご担当いただいた茨城県立大子清流高等学校の生徒さん・先生方など、多くの皆さんに心より感謝したいと存じます。また、大会に際して行き届かなかった点多々あると思いますが、それは今後の大会に活かすということでご容赦をお願いいたします。

今回、地方大会を開催してみて感じたことは、お寄せいただいた原稿にもありますが、基調講演、シンポジウム、交流会、座談会、高校生の発表がセットになって地方大会が構成されているということです。一部に参加しただけでは実はこの地方大会の開催意義や内容を深く理解することはできないと思いました。私が座長を担当したシンポジウムでは、大子町の農林水産物にどのように付加価値を付けて、どのように販売したらよいか、主にマーケティング戦略を中心に議論したように思います。他方、地元農家の皆さんの座談会や高校生の発表は、大子町の現実や実態に即して何が課題であるのかが明らかになったように思います。実は、後者の実態を踏まえて、前者の将来展望を議論するというような位置づけで考えると、

今回の地方大会の意義、大子町の置かれた状況とそれをいかに改革していくべきなのかといった視点がより明確になったと思われます。私の考えでは、今回座談会でお話しをお聞きした農家の皆さんはご自身で販売先を開拓してきたパイオニア的な農家ですが、そうした地域農林水産物の市場開拓にはやはり行政などを含む組織的な取り組みも不可欠ではないかと考えます。実践総合農学会では、東京農業大学での中央シンポジウムに加えて、今回のような地方大会が重要なテーマになっているという感を強くした次第です。

一方では、シンポジウムにしても、地方大会にしても、参加者が少ないことが気になります。地方大会では地元の皆さんにも多く参加して欲しいし、そうした地元の皆さんが興味を持って主体的に参加できるようなテーマや討論内容、パネラーの選定が必要になるかもしれません。やはり、地方大会の企画力が重要と思います。しかし、私が特に気になるのはやはり学会員の参加が少ないということです。これも企画力不足といわれるとそれまでですが、実践総合農学会がどのような意図のもとに設立されたのか、そのために重要となるのが中央、地方のシンポジウムや学会誌の発行ということにあると考えると、やはり 300 人を超える会員を有する学会にしては大会参加者が少ないのではないかと思います。

本学会の企画運営は、会長や事務局長を中心とした少数の役員や事務局に任されていますが、学会としての企画・運営能力を高めることも学会としての今日的な課題の一つではないかと思っています。

新年を迎え、これから新年度のシンポジウムの企画を早急に立案しなければならない時期に来ております。会員の皆さんには学会に対する忌憚のないご意見やご要望をお聞かせいただき、新年度が充実した学会活動になるよう皆様の積極的な参加を期待して、編集後記にかえさせていただきます。



パネル・ディスカッションの様子
(左から、北田事務局長、宮林教授、大浦教授、大津氏、藤田氏)

実践総合農学会への入会にあたって

埼玉県立杉戸農業高等学校 田熊 重利



会員の皆様、はじめまして。私は、埼玉県春日部市の田熊重利と申します。現在の仕事は、農業高校の先生をしております。この度、実践総合農学会への入会をいたしました理由としましては、私が卒業いたしました東京農業大学農学部農業経済学科の恩師の一人であります本会事務局長の北田紀久雄教授の奨めが、第一にあります。自分が学生の頃と全く変わっていない北田先生の優しい語り口の中に物事への熱心な取り組み（この文も北田先生の奨めで書かせていただいております）に懐かしく惹かれました。

第二の理由としましては、現在、勤務させていただいております農業高校の学習内容の変化に対応した自分自身の勉学に新しい挑戦、また、学問や人々の出会いを求めることにあります。農業関係高校に学ぶ高校生の一年生の必修科目である「農業と環境」（平成 25 年度入学生より施行の学習指導要領の新科目）では、「農業と環境のかかわり」のほか「農業と農村の役割」、「農業と国土・環境の保全」であるほか「バイオマスエネルギーの活用」、「持続可能な農業の維持と発展」といったこれまでの農業科目に位置づけられていなかった分野の学習が求められており、いずれも作物や園芸等の栽培や畜産動物の飼育、環境分野、食品分野、バイオテクノロジー等のすべてを網羅した総合的な内容が含まれています。

今、情報化社会で専門書も簡単に入手できるほか、インターネット、スマートフォンで知りたい情報やリアルタイムなニュースも簡単に入手できます。先の学習内容も「調べる」ことをすれば理解し、生徒たちに話すことはできるでしょう。しかし、私が目的としているのは、現場での生きた情報、また、それら、その分野で活躍している人たちや学生などの対話によって得られた情報と思っております。

この学会に入会したことで、私自身も研究者として皆様の一員になりたいと考えています。具体的には、論文等の執筆があります。食・農業・環境に関する内容で新しく知り得た情報をもとに論じるまでになっていきたい、そのための学会の入会と考えています。現在、私がテーマにしたいと考えているのが環境と経済の共生や地域資源を活用した経済の活性化などです。しかし、この実践総合農学会のテーマとなる食・農業・環境は社会科学、自然科学に関係なくすべて専門外ではないととらえ、関心を持って取り組んでいきたいと思っております。皆様、今後共、宜しく願います。

